西郷古酒蔵群の発掘調査

灘の酒蔵の歴史

灘区大石の付近は、酒造りの町として広く知られていますが、この町で清酒造りが盛んに行われるようになったのは江戸時代ごろからといわれています。

「灘の生一本」と呼ばれる清酒は、当時の首都江戸でたいそう評判になり、ブランド酒として定着すると、江戸っ子たちにもてはやされるようになりました。六甲山から吹き降ろす「六甲おろし」の冷たい風が酒造りに適していたことや美味しいわき水がわくことも、灘の酒をいっそう美味しくしたといわれています。

当時灘で作られた清酒は、専用の船にのせて江戸まで運んでいました。江戸時代酒だるを運ぶ船を「樽廻船」（たるかいせん）とよびました。海に近いこの町は江戸へ酒を運ぶ船を寄せやすく、味の落ちないうちに江戸まで運ぶことができたのです。こういった事情も、灘の酒が美味しい酒」として江戸っ子に好まれる理由だったようです。

酒蔵の発掘調査によってわかること

神戸市教育委員会では、これまでにも何度か灘の酒蔵を発掘調査してきました。「灘の酒造り」は神戸の伝統産業であり、これからも大切に守り伝えて、将来に残さなくてはいけないと考えているからです。

現在沢の鶴資料館がある場所や御影石町にある白鶴酒造の「波返し蔵」など、灘五郷の中でも古い歴史のある酒蔵がこれまでに調査され、それらの調査の結果から、江戸時代から明治時代当時の酒造りの実態がしだいに明らかにされつつあります。

すべてが手作業で行われていたその当時のお酒は、また一味ちがった味わいがあったかもしれません。江戸時代のお酒の造り方やその特徴など、当時のことがいろいろわかれば、その知識を今に生かして、さらに魅力ある「灘の酒とまち」に発展させることができるのではないかと考えています。

そんな手がかりになる可能性をもとめて、わたしたちは古い酒蔵の発掘調査を行っています。

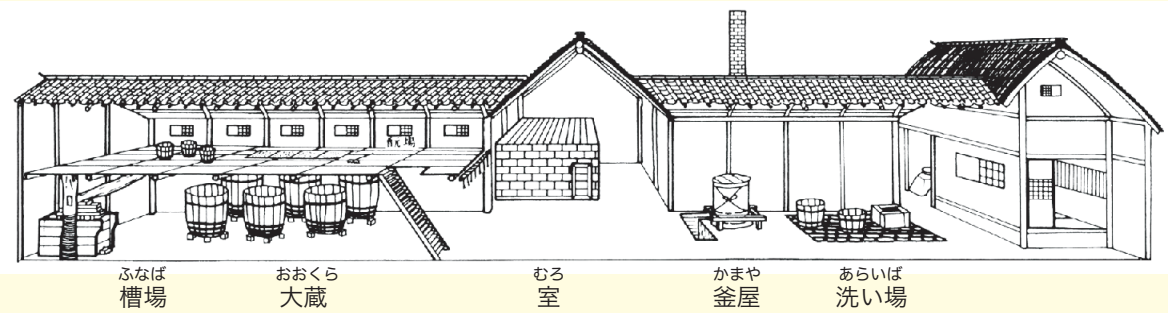


図１．代表的な酒蔵の構造

灘の酒蔵は、六甲おろしの冷気を効率的に利用するため東西に長くつくられる。原料の米を洗う「洗い場」、米をむす「かま場」（釜屋）、むした米にこうじをまぜて発酵させる「むろ」、発酵した米から酒をしぼり出す「ふな場」などがある。（図は伊丹市教育委員会発行の「伊丹の民具　伊丹の酒造り道具」から転載しました。）

今回の調査の成果

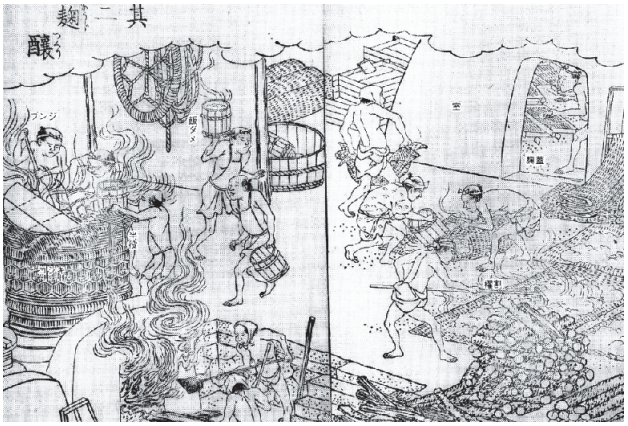
今回調査を行ったのは、最近まで「金盃酒造株式会社」という酒造会社があった場所です。明治時代創業の由緒ある酒造会社で、業界でもいち早く近代的技術をとりいれるなど新進の気風に富んだ蔵元と言われれています。

今回の調査ではさまざまな時代の遺構が発見されましたが、その一部は、「金盃酒造」株式会社の酒蔵です。見つかったのは、煉瓦でつくられた「かまど」と、酒の原料である米を洗う「米洗い場」とよばれる作業場です。これらの施設は大正時代ころのものと考えられますが、その構造は江戸時代の酒蔵とほぼ同じでした。大正時代にはまだ江戸時代のお酒のつくり方がうけつがれていた様子がわかります。特に「米洗い場」は発掘された例も少なく、江戸時代の本にでてくる酒造りの絵とそっくりです。

今回の調査で見つかった大正時代ごろの米洗い場

江戸時代の本「日本山海名産図会」に描かれた米洗い場

今回の調査で見つかった大正ごろの「かまど」
洗った米を蒸して、醗酵させる準備をする場所

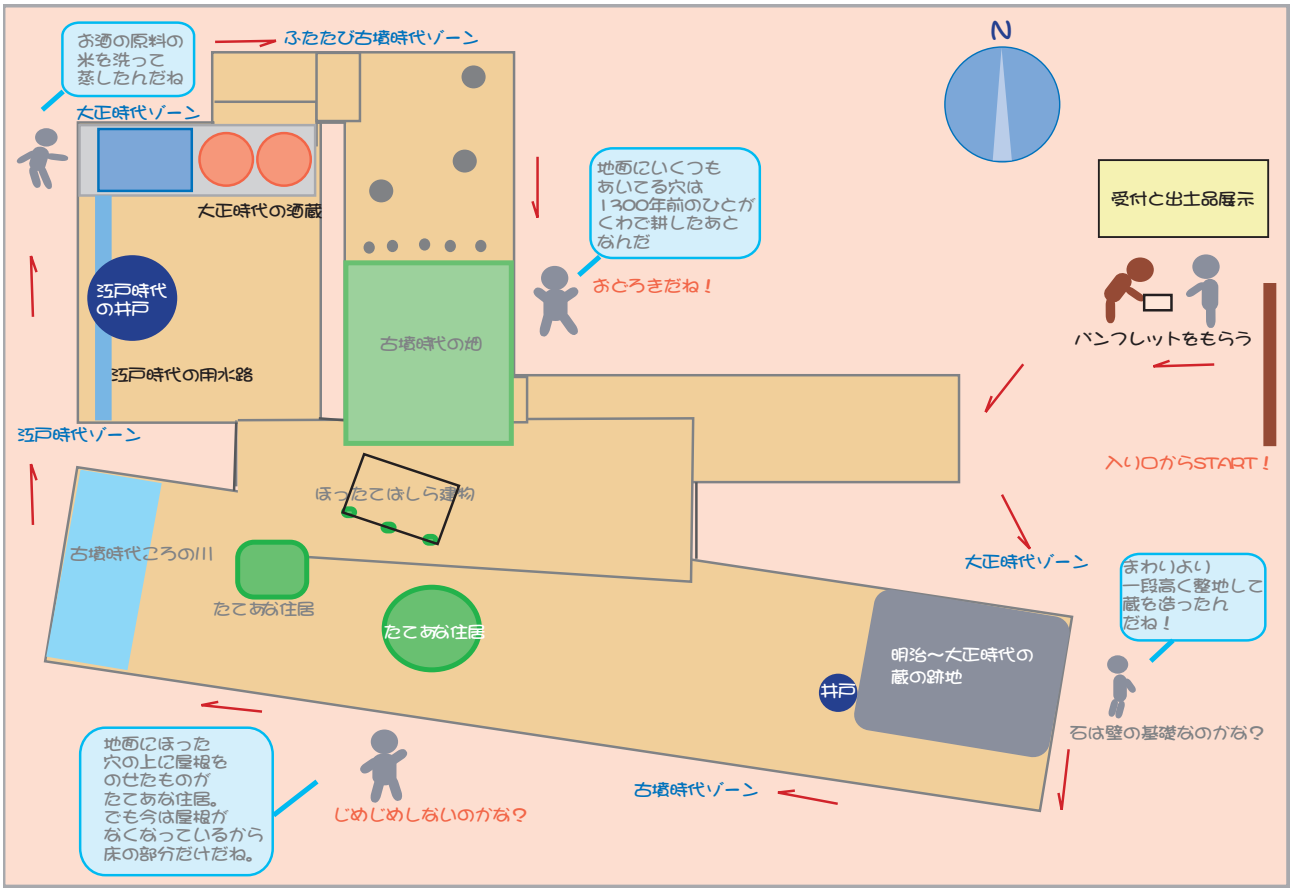


江戸時代の本「日本山海名産図会」
に描かれた「かま場」

酒蔵の下には…

さらに興味深いことに、これら大正時代の遺構の下には、もっと古い江戸時代の遺構があることもわかりました。そして、江戸時代の遺構の下にも、もっと古い古墳時代の遺構も存在するのです。

この場所には大正時代の酒蔵と、江戸時代、古墳時代と異なる３つの時代の遺跡が何層にも重なっていたのです。このことから遺跡をとおして、この場所が1300年間でどう変わっていったかが読み取れます。



西畑古酒蔵群発掘現場マップ（見取り図）

大正時代ゾーン・・・酒蔵の一部が発見されました
江戸時代ゾーン・・・用水路、井戸などが発見されました（西暦1750年～1800年ころ）
古墳時代ゾーン・・・たてあな住居、ほったて柱建物などが発見されました。
（西暦500年～600年代）

江戸時代遺構のなぞ

江戸時代の用水路

今回発見された江戸時代の用水路は石を組んだ立派なもので、なんども改修されていました。この水路より東側はほとんどが水田だったにもかかわらず、田んぼでは使うはずのないお茶碗やお皿がたくさん出土しました。水路の西側には田んぼがないことから、水路の西に人が生活していた場所があるのかもしれません。

水路より西は調査範囲外になるため、今回の調査ではその真相は明らかにできず謎のままになりました。

古墳時代の遺構

このほか古墳時代の竪穴住居やほったて柱の建物なども見つかっています。建物の柱穴は一辺が50cm以上もある立派なものでした。家の痕はある範囲に集中して見つかっていて、家の北側には畑もありました。畑は当時の人が耕すためにクワをふるった痕跡までがくっきり残っていました。このことから1300年くらい前、ここには何軒か家が立ち並んでいて、そこの住人が家の近くで作物をつくっていた様子がうかがえます。畑の端にはさくがあったとおもわれる場所が見つかっていて、何か集落の境界を示すような、特別な意味があったのではと考えられます。

出土品について

今回の調査で出土した「かめ」
明治時代後半以降と思われる層から出土した。

今回の調査では酒蔵のかまどを作るためのレンガがたくさん出土したが、そのなかには製造会社のマークが押されたものも多く確認された。
写真は福岡県久留米市に現存する荒木窯業株式会社製の耐火煉瓦。

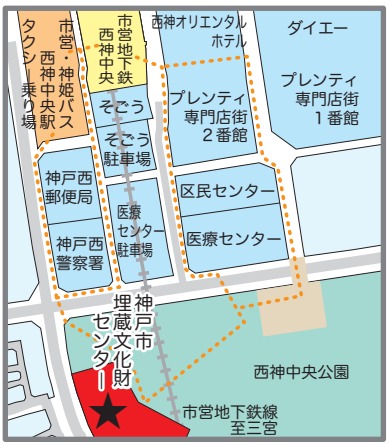
今回の調査では、明治～大正ごろの酒蔵に関するいろんな道具や、煉瓦、江戸時代のお茶碗やお皿などが出土しました。これら出土品はこれからさらにくわしく調べるために、現地調査が終わった後西区にある「神戸市埋蔵文化財センター」に送られます。

神戸市埋蔵文化財センターは、神戸市内全域でおこなわれる発掘調査で出土したさまざまな遺物を一同に集め、調査や公開を行う施設です。

これまで神戸市内で行われた発掘調査の出土品をたくさん見ることができ、さまざまな考古学体験講座も実施しています。

ぜひ一度ご家族で神戸市埋蔵文化財センターまで遊びに来てください。

神戸市埋蔵文化財センター

開館時間　午前10時から午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休 館 日　毎週月曜日（臨時休館日もあります）
入 館 料　無　料

〒651-2273
神戸市西区糀台６丁目１　西神中央公園内
TEL 078-992-0656　FAX 078-992-5201
http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/maizoubunkazaic/index.html